

先日、東千歳駐屯地で訓練があり、外来宿舎に宿泊したが、玄関脇の排泄された雪の下から顔を出した芝桜が既に小さな花をつけ或いは蕾が膨らんでいるではないか。雪の下では春が活動し始めている。春、蠢動である。福寿草が咲いたとの便りもあり、確実に春が近づきつつある。

道内全域は寒波に見舞われているが、ここ十勝地方は所謂十勝晴れに恵まれて、大自然を満喫するには最高の日和である。第5回十勝大平原国際クロスカントリー大会は、この様な素晴らしい天候に恵まれての大会となった。帯広市、芽室町、中札内村に跨って実施される本大会には、言うまでもなく、第5特科連隊がコース整備等で協力している。所謂歩くスキーは、スピードを競うのではなく、眼前に展開する大自然の息吹を感じ、自然と対話する絶好の機会であればならぬ。樹林地帯、緩やかにうねっている耕作地帯の広さ、時に目を上げれば、冠雪し、陽光に煌く日高山脈の山並みに「あの山は〇〇山」と気の合う仲間と話しをしながら、大会ではなく、時間が許すならば、バーベキューでもやりながらの、未知なる自然を縦横に歩いたら醍醐味も増すだろう（勿論安全の確保は最優先事項だが・・・）。この様なクロスカントリーが本来の楽しみ方か。実態は後述するように周りを堪能する余裕は無かったが・・・。一般大衆クロカン人口は、3万名程度と言われている。大会参加者を見ても、女性やお年を召した方が、意外に多く、冬場の健康管理には最適なのだろう。クロカンの問題は、練習場を確保出来るかどうかにあるのだろうが、幸いなことに当地は、5km程度のコースが常設され、比較的整備もされている。

大平原ダイナミックコース（60km）、大平原コース（35km）、中札内村ピータンコース（20km）、芽室さわやかコース（10km）、芽室あいあいコース（5km）の5種目で行われたが、自衛官も個人の資格で色々な参加しているものと思われる。小生も行きがかり上（という言いすぎか。）無謀にも20kmコースに挑戦した。

20kmコースは、名勝岩内仙峡のレストハウスをスタート地点とし、道路横断2箇所、岩内仙峡の吊橋をも通過するコースだが、当初の数キロはカラマツの樹林地帯をアップダウンするコース、技術も伴わない小生としては、緩傾斜といえどもスケータリングが出来ず、一気にスピードダウン。小生より明らかにお年寄りや若いとは言えない女性にも抜かれてしまう。それを抜けると耕作地帯であろうか緩やかな下り坂であるが、所々の一見それ程ではないアップダウンに相変わらず悩まされる。行程の半ばを過ぎたところで、生チョコとポカリスエットをふるまわれ、鋭気をやや取り戻したか。そういえば、同行支援の諸官らにも多大の迷惑をかけた。体力の無さと訓練不足を痛感しつつ、辛うじて、中札内中央公園のゴールに倒れこむ。タイムは言わぬが花、来年は2時間を切りたいものだ。

完走証ならぬ完歩証を貰い、温泉で汗を流し、飲んだ缶ビールの美味なこと。これだから止められぬという事になるのだろう。夜は参加者全員と反省会というコースは定番か。（写真は追ってアップしますので、勾う御期待）。

本大会は、糠平湖～然別湖横断スキー大会等、規模やコースの特色等から選定された北海道セブンスター大会のひとつに挙げられている。まだ 5 回目ということもあり、参加者も 1,000 名程度であるが、圧倒的に管内、道内が多いのは当然としても遠く関東・東北地方からの参加者もある。参加者名簿では三重県からの参加者が遠来の参加者だ。自衛官も O B を含めて 70 名程度が参加していた。65 km、35 km の成績表を見ると従来は、5 師団を含む道内各部隊の隊員が上位を占めていたが、今回は他の大会と競合した為、それほどではなかった。

参考：北海道セブンスタースキー大会とは、

歩くスキー（クロスカントリー）を通じて、北海道の大自然に触れ、冬の健康・体づくり、交流機会の拡大を目的として、趣旨に賛同する各大会開催地が大同団結してセブンスタースキー大会を創設した。小生が今回参加した「十勝大平原国際クロスカントリー大会」の他、網走・女満別で行われる「インターナショナルオホーツク歩くスキーフェスティバル」、千歳の「ちとせホルメンコーレンマーチ」、美瑛町の「宮様国際スキーマラソン」、上士幌町・鹿追町の「糠平湖～然別湖横断スキー大会」、遠軽町他 4 町村の「湧別原野オホーツク 100 km クロスカントリー大会」、士別市の「サフォークランド士別ピヒカラ樹氷歩くスキー大会」がある。この 7 大会全ての完走が期待されている。